
ガラスの破片とある世界史

伊能元帥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ガラスの破片とある世界史

【Nコード】

N2352I

【作者名】

伊能元帥

【あらすじ】

洋館、それがあるのはある国の森。笑いの絶えぬ、人々の階級を超えたパーティーが開かれていた。

しかし、その笑いも戦争と共に消え去っていった。しかし、洋館のシャンデリアが落ちたときに飛び散った「破片」は諦めなかった。道具達の行動から二つの国が動き出していく。

【はじめに】 戦争と洋館（前書き）

正直、くだらないかもしれませんがよければご覧下さい。

少なくとも、これは今の私の文章力を振り絞って書く、コメディで御座います。冒険とコメディですが、その他にしておきました。一応。

もしよろしければ、お気に入りにもどうぞ。

誰でも楽しめる作品だと思いますので。

【はじめに】 戦争と洋館

ある西の国の深い森の道。

その脇にかつて栄光を掴んだ洋館があった。

毎日人があふれ、美味しいものを食べ、酒を呑み、踊り、歌い、楽しい時を過ごしていた。

軍人、平民、王族、農民・・・階級に関係なく、誰もが平等に、笑いの絶えない日々だった。

戦争——それは全てを奪い去った。

人が死に、自然が消え、建物も壊された。

戦争が終り、洋館は残っていた。しかしそこにはもう誰もいない。笑顔もない。何も。

ガラスの破片が散らばっていた。シャンデリアが落ちたのだった。しかし、ガラスの破片は希望に満ちていた。

いつかもう一度、人を照らし、笑いの絶えぬ、人が幸せになれる時間を作る。

信じていた。絶対にもう一度——

【はじめに】 戦争と洋館（後書き）

さあ始まりました。次回からは明るいですからね？夜中に読んでも
恐くないですから安心してください！

第壹話 洋館の中にて（前書き）

第壹話です。どうぞお読み下さい。

第壱話 洋館の中にて

ガラスの破片、それにはまだ名もなかった。

しかし、希望に満ちあふれたガラスの破片に奇跡が訪れる。

天界

キリスト「輝きに満ちあふれたあの洋館・・・」

極楽

仏「人がいなくなっても尚輝き続けるとは何と素晴らしきことか」

なんと洋館はキリストと仏、両方の恩恵を同時に受け取ったのだ。

ガタガタ・・・

破片「・・・皆、大丈夫？」

グラス「・・・ええ、大丈夫よ」

ウイスキー「いやー、俺も今年で50年物か」

樽「俺なんかもう80年だ」

窓「汚れちゃったわ、誰か拭いてくれないの？」

机「マスターはいないのかい？」

イス「あの時の客、結局シミを拭いてくれなかったぜ」

ドア「誰も開けてくれないのはやっぱり寂しいよ」

洋館は意志を持ったのだ。

キリスト「・・・もしもし、仏様？同時に恩恵を与えるなんて奇遇だね」

仏「そうそう、本当に偶然で。意志を持った洋館がこれからどうな

るのか楽しみだよね」

今や、キリストも仏も携帯を持つ時代だ。進歩したなあ。

グラス「これからどうしよう？もう誰も来ないし」

破片「うーん・・・とりあえずホコリを取ろうよ」

布巾「よーし、俺に任せな。水は何処にある？」

ウイスキー「水か・・・」

机「あの時はマスターが用意してくれたけど・・・」

イス「あ、雨だ。どしゃ降りだな・・・」

布巾「もしかして雨でぬらせるかも。」

窓「ああ、そうね。」

破片「じゃあ、まず窓を開けよう。」

フォーク「俺が布巾を押さえる。落ちないようにな」

こんな誰もいない洋館でこんな事が起こったなど誰も知らない。洋館はこれからどうなるのか。

そんな時、森を歩く一人の老人。

第壱話 洋館の中にて（後書き）

これからもまだまだ書き続けます。

これからの展開はもっと面白くしていくつもりです。

どうぞご期待（？）下さいね。

第貳話 笑いつて

布巾「おーっ、もうすぐ雨水に当たる」

机「おーっと布巾君、もうすぐ雨水に当たります」

布巾「冷てえなー！でも久しぶりの水最高」

机「おー！めでたく雨水に到達だー！！」

フオーク「拍手！」

グラス「カチンカチン（拍手）」

イス「ゴトゴト（拍手）」

ウイスキー「チャプンチャプン（拍手）」

道具達の拍手はそれぞれ色々な音がする。

机「布巾君、雨水はどうですかー？」

布巾「超気持ちいいー」

机「これはまさかのサブちゃんだー！」

イス「違うよ、コースケだよ」

破片「北島違いだ」

布巾「よし、もうそろそろしぼってくれ」

のし棒「ぼ、僕でよければ」

机「おつとのし棒君登場だ！内気なのし棒君が大活躍するぞ！暖かく見守ろう！」

のし棒「よいしょ！ピザ生地以来だな」

布巾「・・・よし、良いだろう」

机「いよいよ布巾君がほこりを拭き取る！綺麗になるぞー」

キュッキュツ、コシコシ、ゴシゴシ、・・・（べっ、別に変な音じゃないんだからねっ／＼／＼／＼）

机「大分綺麗になった！拍手ー！！」

布巾「よし！次は2階だ！」

第貳話 笑いって（後書き）

道具達の協力で洋館は綺麗になりました。次はどうなるんでしょうか♪

第参話 活気溢れる道具達

街

農民「戦争終つてもう10年か」

農民2「早いなあ、治安も良くなったもんだ」

商人「あのハンドヌク陛下の御陰だ」

商人2「ハンドヌク陛下は街をまわり、階級など気にせず握手してください」

農民2「それに農地を所有させてくれるし、給料も申し分ない」

商人「支持率が90パーセント超えたらしいぞ」

布巾「二階は汚れてんなー」

破片「あ！何か本があるぞ」

グラス「少しぐらいなら読めるかもね」

道具達はマスターのもと、少し字を覚えていた。

イス「につき・・・きょうもおきやくがおおくてにぎやか・・・」

グラス「せんそうがはじまってにげなくては・・・ようかんももうひとつがいなくなるだろう・・・」

道具達にはそこしか読めなかった。

破片「このへんしか読めないや」

カランコロン・・・

老人「・・・良い家だ」

日記「につ・・・人間か!？」

グラス「・・・考えてみれば日記も喋るのね」

老人「お前達・・・言葉は分かるな」

机「まあ、大体ならな」

老人「この古い洋館を昔のように賑やかにさせる・・・お前達はとも頑張っておるな」

ウイスキー「はあ、ど、どうも有難う御座います」

樽「なんか嬉しいな・・・道具に生まれてヨカタ——」。

。——「！！！」

老人「ハイテンション♪ハイテンション♪」

日記「・・・で、お祖父さんは何の用があつて？」

老人「そりゃ勿論、あんたら道具にも出来ないことはある。それを少しでも手伝おうと思つてな」

第参話 活気溢れる道具達（後書き）

！
気になる人物が出てきたところで続きはまた書きます！お楽しみに

第？話 ハンドヌク陛下（前書き）

さて、もうすぐ道具達が冒険に出ますが、その前にハンドヌク陛下のお話。

第？話 ハンドヌク陛下

え？私ですか？私なんてただ権力を握ってるだけの・・・

なんてね、謙虚に思われてるみたいだけど・・・フッフ、私なんて心の中じゃあ

世紀の大ナルシストですよ！え、分かります？「俺が一番」なんてもんじゃないんです。

「この世の全ては俺様の御陰、俺以外的人类、動植物、鉱物、地球も、未確認生物も何もかも！

皆！このハンドヌク陛下の奴隷よ！俺様が万物の霊長！！イヤッホオオオオオイ！！」

こんなの日常茶飯事ですよ！心の中ではナルシスト。妄想なら何やっただけ構わない！

軍事主義、社会主義、平和主義、資本主義？そんなもんだの絵空事じゃ！

「俺様主義」これこそ真の社会だ！全て、万物の霊長！！それがこの俺様だ！！

世界はこの俺様を中心に回るべきなのだよ！！アーーーーー！！！！ハハハハ！！

ハンドヌク「（こんな私がよく国を統治できたよね、本当）苦しんでいる農民にはそれに

値するだけの農地を所有させる。これが一番の支持率対策。これで国民は増え、軍隊は強くなり・・・」

防衛大臣「あくまでもそれは侵攻の為ではなく、治安維持のために」ハンドヌク「おっと、そうだった（隣国を滅ぼすって言いそうになっただわ）」

農林水産大臣「食糧危機も防げる、ということですよ」ハンドヌク「そう、そして・・・」

側近「……そして？」

ハンドヌク「そ、そして国は豊かになる！（隣国を支配できるって言いそうになったわ）」

厚生労働大臣「その通り。この国はあくまでも」

ハンドヌク「この国はおれさ……」

財務大臣「おれさ？失礼ながらなんですかそれは……？」

厚生労働大臣「おれさとは？」

「ええ？い、いや！この国は資本主義の平和体制だな」

財務大臣「そう、その通りで御座います」

農林水産大臣「支持率主義かもしれません！」

大臣一同「ハッハッハッハッ
W W W W W」

ハンドヌク「ハッハッハッ W W W W W（危ねえ、マジで俺様主義つて言いそうになったわ W W W）」

ハンドヌケ「よし、街を巡回するぞ」

農民「ハンドヌク様ー！」

商人「豊かな土地を有難う御座います！」

軍人「治安は私達がお守りします！」

ハンドヌク「いやー、有難う私なんて（万物の霊長だよ！少なくとも自分の中ではな！）権力だけで」

農民「謙虚なハンドヌク様が素敵ですよ！」

「てっ、ハンドヌケ、照れちゃうじゃないのよ／＼／＼／」

第？話 ハンドヌク陛下（後書き）

ちなみにハンドヌク陛下は男です。

第？話 破片の行動

破片「あのさあ・・・」

俺「何？」

破片「この作品のタイトル『ガラスの破片』でしょ？」

俺「うん、そうだけど」

破片「今まで机とか布巾とかが活躍しちゃって僕が全然出てないんだよね」

俺「これから出すからまず落ち着こうか」

老人「・・・それでは洋館再復興の為、道具作戦を開始する。」

机「おー！なんか楽しそうじゃん」

老人「道具達一つ一つが努力してこそ成せる作戦じゃ。よいな」

樽「勿論だ！」

老人「それではまず・・・ん？」

スタッフ「破片を中心にして」

老人「スタッフなどいらんわいつ」

ぼかつ

スタッフ「あーれー」

老人「よくありがちな演出じゃ、作者も変なこと考えるもんだ。

さて、まずは破片に活躍してもらう」

破片「は、はい。・・・で、何をすれば良いんですか？」

老人「お前にはカゴと共に行動してもらいたい。果物を取るんだ」

破片「果物・・・ですね。」

カゴ「よろしく御願い致す。拙者、西国に降り立ち一五年、工場で大量生産された、あ、ゴム製の、カゴでやんすう~~~~」

スタッフ「無駄な演出いらない」

老人「まだおつたんかい！帰れ！」
ぽかつ

老人「取る果実は何でも構わない。毒があるかどうかはあとでワシが確かめる。山菜もついでに採ってこい」

破片「了解しました。じゃあ行つてきまーす」

破片「お、早速木の実発見」

カゴ「こりゆあ良く熟してる」

破片「なんかでっかい赤いキノコがあるけど」

カゴ「あ、なんだあの人」

赤い帽子をかぶり、髭を生やしたおっさんが栗を踏みつぶした。

破片「あ！せつかくの栗があ」

おっさんはいきなり赤いキノコを食べると妙な音を立ててスリムになった。

破片「何か変な人・・・」

するとおっさんの後ろから緑の色違いのおっさんが出てきた。

カゴ「気味悪いな、あっち行こうぜ」

するとおっさんは栗にあたつてころんだ。そして妙な音を立てて逆さまに落ちていった。

破片「もしかしてこれってスーパーマー・・・うわっなにをするやめ」

第？話 破片の行動（後書き）

なんかもう完全にコメディですねWWW

第？話 福島ザビエル ペリー

破片が山菜を採っている頃・・・

机「ところで爺さん」

老人「何じゃね？」

布巾「お前さんの名前をまだ聞いてなかったんだが」

老人「フフフフ・・・知りたいのかね？」

のし棒「ええ、知りたいですよ」

老人「ワシの名は・・・」

イス「・・・ごくり・・・」

ドア「・・・」

老人「福島ザビエル ペリーと申す！！」

机「・・・爺さん、ワンスモア」

老人「福島ザビエル ペリー」

イス「ワンスモア」

老人「ワシは同じ言葉では言わん」

ドア「アンコール、アンコール」

老人「ふくしまざびえる ペリー」

机「福島ザビエル ペリー・・・ねえ・・・」

布巾「ズバリ作者は歴史ヲタと見た」

第？話 福島ザビエル ペリー（後書き）

爺さんの名前が分かりましたね、はい。

福島ザビエル ペリー！！

第？話 夢

山菜を集めていると、破片はいつの間にか鉄橋の上にいた。

破片「・・・ん？」

その先では炎がぐるぐると回っていた。背景もやたらと角張っている。

自分もカクカクの身体になっているのに気付いた。カゴはいない。

破片「あれ？どうなってるんだ？」

横を見ると、あの赤いオッサンが居た。白っぽい服を着ている。

おっさん「見かけないキャラだなあ・・・」

破片「・・・どちら様ですか？」

おっさん「俺か？俺はスーパーマリ・・・」

緑「何で俺は緑だけなんだよ・・・」

おっさん「弟分！今はお前の出る幕じゃない！」

破片「ココは何処なんですか？」

おっさん「ココか？ココはボスのクツ・・・」

太い声「いつまで立ち往生してんだ。早く来い」

おっさん「行かないと！」

そう言うとおっさんは緑でトゲトゲの化け物に向かっていった。

カゴ「おい。どうした？」

破片「・・・はっ！？」

カゴ「どうしたんだ、急に目なんかつぶって」

破片「ああ・・・ちよつと某ゲームの夢見てた」

カゴ「某ゲーム？・・・まさかさっきのスーパーマ「うわんなにをするやめ」

福島「何だ、皆気まずい顔して」

机「いやー、福島ザビエル　ペリーって、どう呼ぶばいいのか分かるんよ」

第？話 夢（後書き）

某ゲーム・・・分かりますよね。赤いオッサンがキノコを食う、
そう！スーパーマリ・・・あれ、誰か来たぞ？ちよっと思って行く

第？話 提灯

森が暗くなってきた頃。

破片「よし、結構集まったね・・・そろそろ帰ろうか」

カゴ「爺さんも満足するはずだ」

破片「さてと、行こうかな」

そうつぶやいて移動しようとしたその時・・・

サク、サクサク・・・

カゴ「おい、ちよつと待て。・・・誰か来るぞ」

破片「ん？・・・誰だろ？爺さんかな？」

ザクン、ザクン・・・

葉を踏みしめ、ズンズンとこちらに向かってくる。姿は見えないが、威圧感が漂っている。

破片「気をつけた方が良いな・・・」

カゴ「静かに。どんな奴か分からんからな」

と、突然足音が止まった。

破片「止まったな・・・」

カゴ「いや、まだ何が来るか分からんぞ。」

パツ　と赤い光が見えた。間違はなくそれは提灯の光だった。真っ

赤な林檎のような色で、暗闇では

魔法のようにボーッと神秘的に見えた。

ザザザザシユ！

破片「なんか来たぞ！」

カゴ「横に動け！素早く！！」

ドドドドド！！

見上げると10メートルほど先に提灯を持った化け物が立っている。身長は間違いなく5メートルはある。手が何本もあり、鋭く上がった弓を何本も持っている。

赤い着物を着ている。・・・しかし、ココは日本ではない。

破片「なんか見たことのある服装だな・・・日本の民族衣装か？」

その時、化け物は弓矢を一斉に撃ってきた。

ザザザザザシュ！！

カゴ「危ない！ダメだ。洋館に戻ろう」

そう思ったとき、化け物の手と弓が増えていた。それに弓矢も、身長も巨大になっている。

あんな巨大な弓を撃たれたら一巻の終わりだ。

ドドドドドドドドドドドドドシュ！！

カゴ「なんて威力だ・・・木を倒しやがったぞ？」

破片「これじゃとても逃げられないよ・・・！！」

ドドドドドドドドドドドドドシュ！！

カゴ「逃げろっ！こっちだ！」

この化け物は何者なのか・・・それは全く分からない。

何故破片とカゴなど狙うのか？

第？話 兵器実験

弓矢を持った怪物は尚も追いかけてきた。巨大な弓を何回も撃ってくる。

「くそっ、このままじゃダメだ・・・岩の影に・・・」

そう思つて近づこうとした岩に弓矢が命中し、岩が砕けた。

「何て威力・・・」

その時、森の奥から声が聞こえた。

「実験完了。実際に戦場へ持ち込める」

「・・・ん？戦場？」

「収縮可能で特殊な弓を持てる、レーダーで目標を確認できる・・・大成功だ」

ふと怪物を見ると奥の方へ戻っていく。

「つてことはあの化け物が兵器か？」

「この兵器が成功したと伝えれば將軍もお喜びになろう」

「我がグルツ王国の東征も成功しそうですね大佐」

「中尉、將軍の元へ先に向かえ。我々は後に行く」

「了解いたしました」

「・・・軍の兵器実験か。」

「これだけ森をめっちゃめっちゃにしておいてそのまま帰る気か？」

「ハンドヌク陛下も木を一本切つたら二本植えるなんて法律をよく作つたもんだ・・・」

「しかし、木材の輸出も南国との貿易の大きな部分を占めていますから・・・」

「国の利益になるなら仕方ないとして・・・」

「・・・よし、戻ろう。」

「早く帰らないと爺さんも心配するし。
」
二つの道具は洋館へと戻っていった。

第？話 情報

西の国。洋館があるその国についての情報を入手。公開する。

国名 ベレネス朝シュルム王国

建国 340年前

主義 資本

建国者は黄色人種で北方民族。名は不明。それまで土地を治めていたム・ハギ教皇に対して抵抗し

農民を指揮してペレネス朝シュルム王国を建国。

東征に積極的で、教皇軍の残党が治める東の国「ム・ハギ教皇国」と対立し、3年前に戦争を開始、

半年前に事実上終結。しかし条約は結ばれておらず、今だに国境付近は緊張している。

現在皇帝である元商人ハンドヌクによって治安も落ち着いている。

軍隊 志願

陸軍 18万4000人

海軍 8万6000人

空軍 11万7000人

最新式の大砲を使っている軍隊。教皇の軍隊にも匹敵する。

現在ム・ハギ教皇は「シュルム王国は裏切りの王国である。直ちに領土を返還せよ」と

強く演説している。

教皇は他国と手を結んでいる可能性もあり、疑惑も多いことから「黒きキリスト」という異名を持っている。

第？話 情報（後書き）

続くですよ。ええ。

第？話 福島、色々と語る

破片「ただいまー・・・」

カゴ「すげえ綺麗になつてんなー！」

布巾「俺達が頑張ったんだぞー」

福島「随分遅かったな。」

カゴ「軍隊の兵器の実験に巻き込まれて・・・」

どんな兵器に遭遇したかを破片が詳しく話した。

福島「・・・なるほどな。」

ドア「ところでこの爺さんの名前・・・」

福島「私の名前は福島ザビエル ペリーと申す」

破片「ふくしまざびえるペリー・・・」

カゴ「何でそんな変な名前なんだよ？」

福島「そう言われるのは慣れておるわ。親もいないし、理由は分からんよ」

破片「福島さんは何の職業だったんですか？」

福島「私は神官をやっておった」

イス「神官っていうと・・・」

福島「そう。黒きキリスト、ム・ハギ教皇のもとでな」

グラス「教皇ってどんな人なの？」

福島「教皇は金に、物に、領土に凄まじい欲がある人で、キリスト教を祭っているとはとても思えない独裁者だな」

樽「・・・うゝむ」

破片「じゃあこの国も危ないと？」

福島「それは充分言えることだな・・・いつ攻めてくるか」

福島、色々と語る

破片「ただいまー・・・」

カゴ「すげえ綺麗になつてんなー！」

布巾「俺達が頑張ったんだぞー」

福島「随分遅かったな。」

カゴ「軍隊の兵器の実験に巻き込まれて・・・」

どんな兵器に遭遇したかを破片が詳しく話した。

福島「・・・なるほどな。」

ドア「ところでこの爺さんの名前・・・」

福島「私の名前は福島ザビエル ペリーと申す」

破片「ふくしまざびえるペリー・・・」

カゴ「何でそんな変な名前なんだよ？」

福島「そう言われるのは慣れておるわ。親もいないし、理由は分からんよ」

破片「福島さんは何の職業だったんですか？」

福島「私は神官をやっておった」

イス「神官っていうと・・・」

福島「そう。黒きキリスト、ム・ハギ教皇のもとでな」

グラス「教皇ってどんな人なの？」

福島「教皇は金に、物に、領土に凄まじい欲がある人で、キリスト教を祭っているとはとても

思えない独裁者だな」

樽「・・・うゝむ」

破片「じゃあこの国も危ないと？」

福島「それは充分言えることだな・・・いつ攻めてくるか」

第？話 開戦

福島「それで教皇はハンバーガーを盗んだわけだが実はピエロが苦手で・・・」

破片「間抜けな教皇www」

その時、ガタリと音を立ててドアが開いた。

福島「・・・貴様軍部の者だな？上層部の」

元帥「自己紹介しよう。私はシウルム王国元帥アレクヨンドロスと申す」

大佐「次いで、私は大佐のカニツサ」

中佐「私は中佐のリジセイです」

元帥「一時間ほど前隣国の教皇が突然拳兵しました」

福島「・・・教皇ッ！！」

大佐「奇襲だったので軍部も対応に追われており、戦火がもうすぐ此所にも近づいて参ります」

福島「そ、それなら参謀本部は？」

中佐「参謀長のエレキメスですが奇襲攻撃により命を落しました」

福島「・・・そ、そんな・・・馬鹿な・・・」

元帥「どうかなされましたか？」

福島「私の古くからの大親友です・・・」

大佐「そ、それは・・・お悔やみ申し上げます」

机「な、泣くなよ・・・福島・・・」

元帥「フーン喋る机ですか」

福島「あれ？驚かないの？」

大佐「国中で話題ですよ、この洋館」

中佐「洋館と同じく、国の復興も近いかも知れないというのに・・・教皇は何を考えている？」

元帥「そうだ、それと敵軍には恐ろしき洗脳兵器が・・・これまでに2万人以上の兵隊が洗脳されました・・・」

「宗教の拡大化も進むことだし、教皇の戦争にも貢献いたしましょう」

教皇「シウルム王国征伐が終ったら南下して世界最大の海に面する土地を手に入ればこの国は

世界帝国となり、独裁が好きなように出来る」

「世界は私に洗脳され、誰もが私を“お祖父さん”と呼ぶようになるでしょうな・・・」

教皇「王国の時代の終わりの刻々と近づいてきますね・・・」

「さてと、糖分補給しませんと・・・はい、この飴を」

教皇「のちにこれが世界の中核となるでしょう・・・」

第？話 開戦（後書き）

王国の危機！洗脳って誰でしょうね・・・なべやきうどんさんの作品も支援中

です。あ、決して دونالد でも カーネル でもありませんよ？クック
クク・・・

ガラスの破片

首都

ハンドヌク「アレクヨンドルフ！兵隊が一人として戻ってこないとはどういう事だ！？」

国民が栄養失調で死亡するとは！？」

元帥「死亡した住民はいずれも栄養失調。口に飴を何十粒も含み、窒息している者もおります」

ハンドヌク「飴？」

元帥「そうです。敵軍が近づいた場所の住民は狂ったように飴を求め、中毒化し脚気になり

自覚症状もないまま死んでいきます」

ハンドヌク「麻薬中毒か？」

元帥「そうでもないのです。飴は毒素もない普通の飴」

アレクヨンドルフは実物をハンドヌクに渡した。

ハンドヌク「・・・おい、これってもしかして」

戦地

仙人「ハッハッハッハッ！食べる食べる！」

住民「飴え、飴だああ！！」

仙人「いくらでもあるぞ！」

住民「ああああああ、捨てないで！俺にくれ！」

仙人「グウハッハッハッ！」

王国兵士「飴をくれえええ」

仙人「飴？降伏すりゃあやるよ」

王国兵士「降伏する！此所の制空権は教皇軍に渡す」

仙人「要塞陥落か！ほれ、飴だ」

「これはどう見ても、ベルタースオルズナル」

「そう、特別な存在だけが食べられるというですね」

「世界三大宗教の教祖の一人である『お祖父さん』がピエロから独立した時に開発した飴」

「しかし、これは通常では洗脳されません。まず普通の美味しい飴を世間に馴染ませてから、

特殊な洗脳効果を持つ飴を食べさせて信者を増やす」

「中毒性は？」

「通常の麻薬の1000倍は余裕です」

「この状況ではもはや・・・」

「いえ、人間でない物であれば攻撃可能です。なので今巨人型弓兵兵器を量産中の他、例の洋館から

ガラスの破片を呼んでおります」

「噂には聞いておるが破片では戦えないと思う」

「いえ、それを我が国の最新技術を駆使して破片を『ガラスの騎士』に変身させるのです」

「・・・？ガラスを人に変えると言うことか？」

「ええ、その通りです。そうすれば我々にも勝てる道理があります」

しかし、『お祖父さん』は凄まじい勢いで洗脳力を強めていった。

ガラスの破片（後書き）

三大宗教（笑

ガラスの破片2

福島「ガラス、お前に重大な報告がある」

福島は破片にガラスの騎士になって欲しいという国の方針を伝えた。
破片「国の・・・騎士に。」

グラス「名誉じゃないの、それって!」

机「ガラスの破片が騎士となって国を救う・・・まるで小説だな!」
俺「小説なんだけdうわつなにをするやめ」

破片「・・・引き受けます」

福島「良かった。その返事が聞きたかった」

研究所

福島「よし、シュタイン。始めてくれ」

シュタインとは博士のことで。福島の親友である。参謀の通夜にも出席した。

まあ、参謀の通夜については後でゆつくりと。

博士「よし、いくお。失敗しても責任とらないもーんね」

博士は舌を出した。

福島「お前のクセは名医にかかっても50年間治らんわ」

博士「始めるお」

博士は人化機械にスイッチを入れた。

博士「特殊な液体には凄まじい悪臭があるのでミントの消臭剤を撒いてあるお」

福島「うほっ 良い香り」

博士「・・・おおお！完全にガラスの騎士」

福島「名前は『ガラス』としよう」

ガラス「おっ・・・人間の身体になつてるぞ!」

福島「よし・・・次は陛下にご報告に行くぞ」

ガラスの破片2（後書き）

クライマックスはもう少し先ですがだんだんと盛り上がっていきま
す。

第？話 教皇の心の内（前書き）

本作品で大悪人の教皇。その心の内を暴いて見せましょう。

第？話 教皇の心の内

私は乞食だった。

50年ほど前、私は落ちぶれたム・ハギ2世から生を受け、捨てられ、路上で乞食として暮らした。

自分の親が治める土地で。反乱の起きる土地で。人々が苦しむ土地で。

教皇領に大型のギャング組織が侵入した情報を得たとき、私は考えた。

ギャング組織を乗っ取ろう、そしてム・ハギ2世を殺そう——と。ギャング組織は予想以上に恐ろしい物だった。しかし、その環境で私は昇格していった。

そして遂にギャング組織を乗っ取った。そして大規模なテロ組織として教皇領を侵攻した。

教皇領は荒れ果てた。しかし、それも奴隷に整地させた。ム・ハギは300年以上生きていると

嘘を信じ込ませ、信じない者を処刑した。そしてム・ハギは『一人』だと偽った。親を受け継ぐ

3世になりたくなかったから。独裁者、黒きキリストとして。人格を消し、孤独に政治を続けた。

ある日、隣国の王国に侵入して人知れず森に行った。

とある洋館。実に賑やかだった。そうだ。此所の王国は恐怖政治ではないのだ。ますます憎くなる。

国民は好いてくれる物なのか？・・・それよりも民を『物』として扱わない？

私には人格がないも同然だ。王国が羨ましいなんて事は・・・無い。絶対に。

洋館に入るとマスターと客が温かく迎えてくれた。マスターは確か・
・名前が思い出せない。
客は席を譲ってくれた。おしほりもワインも用意してくれた。見ず
知らずの私に話しかけてくれるし、
話題も面白い。つい嬉しくなって笑ってしまった。・・・なんてこ
とだ。

そして私は王国に戦争を仕掛けた。あの洋館はどうなっているんだ
ろうか。

今の皇帝、ハンドヌク。・・・あいつ、マスターに話し方が似てる
ような気がする。

第？話 マスター

「陛下！連れて参りました」

「おお！成功したみたいだな」

城の門が開き、大勢の兵隊が囲んでいた。城は目を疑うほどの美しさで、奥にハンドヌクがいる。

グアラスは王国がこんなに大きな国だとは思ってもみなかったので驚いてしまった。

「この方がガラスだったのか。科学は素晴らしいなあ、本当に」

「私がガラスと・・・」

グアラスはハンドヌクの顔を見て仰天した。心臓がドクツと言うのはこういうことなのだと確信した。

ハンドヌク・・・それはかつてのマスターだった。

「・・・マスター!？」

「え？マスターって私の前の職業・・・何で知ってるの？」

「私は洋館のシャンデリアのガラスの破片なんです！マスターの行方が何よりも知りたかった」

「おお・・・なんとという運命の巡り合わせ・・・本当に不思議だ」

「マスターには色々と面倒をかけましたね」

「それからもう2年か・・・早いもんだ」

「マス・・・いえ、陛下。敵軍は凄まじい勢いで軍隊を洗脳していきます」

「ザビエル君、マスターと呼んでも良いのだよ？」

「い、いえ、陛下と呼びます。それでは失礼」

「うむ。・・・あの教祖とやらめが・・・元帥。」

「はっ。いかがいたしましたか？」

「巨大弓兵型兵器を出してくれ」

ガラスが襲われた兵器だった。

「この兵器の実験は何処でやったんですか？」

「ん？・・・そうだ、ちょうど洋館の近くの森だった」

「実は一度、これに攻撃されたことがあります。何とか逃げましたが、凄まじい攻撃力でした」

「そうか。それでは効果は確かだ。・・・ガラス。戦争の支度をしてくれ」

「・・・分かりました」

第？話 キャンディ

「近代的な武装をしてもらいたい」

「連射式の銃と戦車を一台よこそう」

「お、重い・・・」

ガラスの身体には重かったがすぐ慣れたらしい。

「よし、これで完璧な武装だ。それともう一人、洗脳防止対策としてハイケル・マクソンを付ける」

「プオー！ハローミスターグアラス」

「声がかん高い・・・」

「君たちには戦車部隊と共に行動してもらう。目的地は首都から800？地点の都市だ」

「戦車隊諸君、武運を祈る」

「ハッ！」

教皇軍は謎の飴を駆使して軍隊を殲滅中。どんな手を使ってくるか一切不明なので嚴重に注意する事。

800？地点の都市

ビルは崩れ、不気味な甘い香りが広がり、爆風が吹き荒れていた。

「何だこの爆風は・・・？」

「隊長！無線通信が入りました」

「何？・・・二日前に出撃した部隊？」

「あああ、美味しい美味しい・・・ゲホッ、ウェエ・・・美味しい・・・もつとくれええ！！！」

「何だ！？どうした！？どうぞ！？」

「飴が・・・飴が美味しいですよおお！？食べないんですかああ！？」

「ダメだ・・・気分が悪くなってくる・・・」

「隊長！前方から飴の爆撃が！」

「飴だど！？これはまさかの戦場ギャグかあ！？」

飴が砲台に詰まって戦車が故障した。

「・・・隊長！ゾンビです！亡霊が何百万人と迫ってきます！」

「やはり・・・飴に何か凄まじい中毒性があるな・・・」

飴は戦場にドンドン広がり、兵隊が全く機能しなくなっていた。

その頃、教皇はキリスト放棄宣言を出し、「ベルダース教」という謎の宗教を立ち上げた。

信者は皆狂ったようにこう言う。「我々は特別な存在」と・・・。

第？話 キャンディ（後書き）

特別な存在だと感じる私は信者

第？話 世界のお祖父さん

「隊長！ゾンビが近づいてきます！」

「何て数だ・・・発砲！」

戦車隊は銃を大砲を撃ちまくった。

「H A H A H A H A H A H A H A H A」

不気味な笑い声と共に目の前の真っ黒なビルの上に孫と祖父らしき人影が立っていた。

「信者は皆頭が四歳」

「そつ、そこにいる二人ー！此所は危険D A 早く避難しなさい」

「私のお祖父さんは只のお祖父さん・・・しかし私は世界のお祖父さん 皆々 私の

特別な存在だからです」

そういうと老人はキャンディを投げた。するとさっきまで倒れていたゾンビまでもがそのキャンディに群がった。

「す、凄まじい中毒性・・・」

「初めてのキャンディはベルタースオルズナルでした・・・それは脳の快感を何兆倍にも引き出し、

恐ろしい中毒性を持ち、私は世界滅ぼす資格があるのだなと感じました。・・・今では、私は

『世界のお祖父さん』。孫に与えるのは勿論、支配者の子孫である資格を持つものが食べられる

キャンディ・・・何故なら、彼もまた、特別な存在だからです」

「悪魔め！ゾンビからブツ倒してやる！・・・空軍出動願う」

地方では機械兵が接戦を繰り広げていた。どちらの国も首都は固く守られ、また危機に晒されていた。

「教皇！機械の軍隊が民衆を撃破しました」

「キャンディの洗脳も不可能・・・ならばキャンディミサイルがあるだろう？」

「しかし、あれには多額の・・・」

「黙れ！戦費が何だ！？人を殺せばいいんだ！！」

そう言い残し、教皇は密室の中で号泣した。

「グッ・・・ウウウツ・・・ク・・・王国めえ！！私にあるのは人を殺す力と権力だけだア！！」

何故こんな・・・悪魔共が・・・敵国は・・・ハンドヌクは・・・ッ！！」

「洗脳活動順調に続行　ベルタース洗脳計画はおはようからおやすみまで地獄の快楽を与える

ベルタースオルズナルが提供します」

第？話 世界のお祖父さん（後書き）

洗脳計画もこの小説もまだまだ序盤だと感じました。

第貳拾壹話 通夜と影の人

はい、皆様ご機嫌いかがですか？今回は福島ザビエル ペリーとシユタイン博士の親友であつた

参謀長エレキメスの通夜を詳しく再現しようと思います。．．．私ですか？何を言っているのです、

私は第壹話から登場していますよ？敬語じゃありませんけど．．．あ、今誰か中の人って言った！

惜しい。惜しいけど私は影の人と申しまして、一言で言つとナレーターです。全くもう、色んな

物語で活躍してるつてのに、誰も私に目を向けてくれない。桃太郎なんか良い例です。最初の部分が

無かつたらどうです？いきなり婆さんが「こりや大きな桃」ですよ？意味不でしょ？だから少しくらい私に目を向けてくれたつて．．．べつ、別に貴方の為に読んであげてる訳じゃないんだからね／／／／

あ、そうそう、もう一人。桃太郎とか洋館を見て私に状況を伝える「実況見分さん」がいます。

桃太郎の時代にカメラなんてないんだから．．．ね。

その日、福島は涙をこらえて通夜に参列した。

「シユタイン．．．」

「親友になつてからもう70年だお．．．」

「三人でよく遊んだもんだな．．．あの頃は教皇三世もまだ生まれてなかつたな」

「参謀本部長、学者、神官．．．進路は皆違つたけど、2ヶ月に一度ぐらいは会つてたお．．．」

「ワシは神官辞めてから行商だつたけどな」

儀式が進む中、二人は黙祷を捧げていた。

「・・・ん？シュタイン、あれは？」

「何だお？・・・もしかして教皇？」

「教皇？・・・教皇！！」

福島とシュタインは小さく叫んだ。

「何でこんな所に・・・敵国の参謀の死を笑いに？」

「国の独裁者が一人でこんな所にはこないと思うお・・・」

耳をすませてみると、教皇の言葉が耳に入った。

「参謀長・・・ご苦労だったな」

「・・・ご苦労？」

二人は不思議に思っ^てて教皇に近づこうと試みた^が、自分たちの番が回ってきたので諦めた。

第貳拾壹話 通夜と影の人（後書き）

教皇「続くんだよ・・・ご苦労だったな」

ハンドヌク「作者の脳は・・・おかしくなってきました」

第22話 ハイケル・マクソンの軍功

戦場で隊長は苦戦していた。

罪も無き民間人がゾンビとなり、激しい中毒になり襲いかかってくるのを大砲で倒すのが平和を守り

民間人を保護する義務がある隊長の精神的に追いつめていたからである。

そんな時、存在意義が疑われてきたハイケル・マクソンが立ち上がった。

ハイケルは戦車の上に立つと曲を流しして踊り始めた。

「プオーー！ヘイー！ララン♪ トウルルルルル♪ リズムの♪ 効果音は♪ 世界の誰にでも分かる♪

共通の名曲ー」

ゾンビに笑顔が戻り、だんだんと人に戻ってきた。

「ハイケル！キング オブ 演歌歌手兼内職の小父様！」

ハイケルはキングオブ演歌歌手兼内職の小父様。

「生まれ持つ能力を生かし平和的に洗脳を回復するハイケルは最高の軍人だ！」

「アル意味最強・・・か。人間は面白い人が沢山いるのかあ」

此所は「ラベスガス」と言ってギャンブルなどが楽しめる大都市である。

敵の攻撃がストップした為、人民の救出活動、栄養失調や脚気、壊血病などの治療にあたった。

後に最初の反撃となったこの戦いを「ベルタースからの一の解放」と呼ぶこととなる。

「ハイケル・・・お前内職なの？」

「内職兼演歌歌手！結構儲かってますよ！少なくとも窓際族よりは

ね！」

ガラスは前向きで変人なハイケルをある意味軍の要だと思った。

「ガラス、前のビルに入って人民を救出してくるように。」

「はい、了解しました」

第22話 ハイケル・マクソンの軍功（後書き）

ハイケル・マクソン！プオー！

第23話 ビルからの景色

ビルに入ってもハイケルの歌声がまだ聞こえてくる。賑やかで良いが……

中には兵士が何人もいて、最上階にも救助隊は到着しているようだった。

「このビルには生存者はいましたか？」

「おお、英雄グアラス。お前は王国全土で有名だぞ。

で、生存者だがまだ見つかってない。ビルから外に出て飴を求めた、と見れる」

「なるほど……」

「最上階に行つてみるとこの都市の壊滅ぶりが分かる。行つてみな」

最上階に行つてみると、ギャンブル店やパチンコ店が倒壊している様子が見えた。

「洗脳された人々が……」

「その通り。ビルを壊したのです」

「……救助隊の方？ 教皇の使いですか？」

「そんな訳ないでしょ。この格好を見れば分かる」

赤い服に白いフサフサした物が付いている。袋を持って帽子もかぶっているようだ。

前に洋館で12月の終わり頃、マスター……ハンドヌクが着ていた気がする。

「貴方は……どちら様ですか？」

「世界の子供達に夢をお届けする不思議なお祖父さん」

「ベルタース……」

「彼奴は飴で人を不幸にする。本当は美味しい飴を使って。それが私は許せない。この都市にだって子供達が」

いる。毎年こんな私を待っていてくれる子供達がね。緑の木にそれ

それぞれのセンスで精一杯の個性を出して飾る。

待っている子の靴下も飾られている中を、メリー……」

「あ！敵軍が来たみたいです！貴方も早く避難して……」

そう思って振り向いた時には爺さんはおらず、空を見上げるとソリが空を飛んでいたような気がした。

「敵軍は大量の飴を持って出現！隊長命令でグアラスに軍馬での突撃を命じる」

「突撃ですか……引き受けましょう！」

グアラスと教皇軍との直接の戦いはこれが初めてなのだった。

第23話 ビルからの景色（後書き）

皆様に爆笑をお届けします！

噴き出した物については返却いたしません。ご了承ください。

第24話 抗戦

グアラスの軍馬は教皇軍の将兵に向かって突進し、グアラスが斬りつけた。

将兵は悲鳴を上げて倒れ込む。後ろから援軍が駆けつけてきた。心強い。

グアラスは次々に敵兵を倒し、遂に小隊を壊滅させた。次の小隊が向かってくる。接戦となる。

次々に襲いかかってくる敵軍をどんどん倒していく。グアラスの兵隊の前に数の多い教皇軍は

敗れ去っていく。まるで源平合戦のように。

「よくやったな、グアラス！敵軍はだんだんと減ってきている！」

「大砲での援護を引き続き御願います！」

王国の大砲は最新式で、教皇軍は持っていない。かのハプスブルク家でさえ憧れたという大砲だ。

「敵軍本本隊が動き出したぞ！兵隊を総動員しろ！警察も待機！」

王国軍の兵隊は指揮が上手い。一方、教皇軍は数が多いだけのようにはしか見えない。

遂に二つの軍がぶつかり合う。的確な素早い判断により、教皇軍は次々に壊滅していく。

「こちら元帥府。・・・敵軍壊滅！了解した！陛下ー！」

「敵軍が壊滅した？よっしゃあ！グアラスマンセー！」

「・・・マンセー？・・・今日焼き肉いきますか」

「元帥、太っ腹！」

「やった！隊長、敵軍壊滅ですよ！」

「よし！次も気を引き締めて行くぞ」

グアラスは外の人間の世界に出ていきなり戦ったわりには慣れてい

るように見えるほど上出来だった。

初めて見た世界が戦争の世でも、ガラスは人間の優しさはしっかりと確信していた。

マスターとかつての客・・・あれほど良い人に出会えたなんて、今思えば奇跡だと思う。

戦況も落ち着いたので、都市機能の回復、建築の再開など、国からの指令も増えてきた。

「・・・この都市があつと言う間に回復したけど」

「大丈夫」まだまだ洗脳された都市はある。教皇が主導権を握っているのに変わりはないよ、孫」

「飴だけで人間はすぐ洗脳されちゃう。弱いんだ」

「ああ、人間なんてカスにも満たない」

「そーなのか」

「そーなのだ」

第25話 最強の敵と飴

「陛下、どうやらガラスが軍功を上げたそうですよ」

「何！それは本当か？」

「ええ、どうやら数の多い敵軍をハイケル・マクソンと共に破ったとか」

「我が国にも光が見えてきたという所だな！勿論それもこれも私の軍功」

「は？陛下、いかがでしたされましたか？」

「あ、いや。ガラスとハイケルの軍功だな！（心の内を声に出しちゃダメだろ俺！俺様主義は

妄想だつて何回言い聞かせれば済むんだ！）」

「そ、そうですか。・・・それにしても陛下、最近趣味をなさられてないですね？」

「ああ、そうだったな。・・・久々に愛車の掃除でもするか」

「実に良い車ですね」

「磨けば更に美しくなる。・・・それでもう10年も使ってる」

> i 2 6 1 4 — 4 4 6 <

「うむ、綺麗になったことだし、ちょっと運転」

ハンドヌクは庭の道で愛車を運転した。

「エンジンもしっかりとかかるようですね」

「これで大丈夫だ。愛車も綺麗になったし、作戦を立てる作業に移る」

一方ガラスは都市部の警備をしていた。奇襲攻撃に備えて大砲が

様々なところに置いてある。

「ガラス、隊長命令だ。その廃墟のビルに偵察に行ってきたくれ」

「はい、了解しました」

ビルの中は薄暗く、20年ほど前に廃墟になったらしい。普通の人間なら恐ろしく不気味で逃げだしているが、ガラスは気にしなかった。

「別にこれと言っておかしい事なんてないな・・・」

そう思つて最上階まで到着し、広い所に出て前を見たときだった人だった。間違いなくベージュの服を着た老人である。

「・・・ようこそ」

「どなたですか？住民の方？」

「私は世界のお祖父さん・・・その紋章から見て君は王国軍の切り札、『ガラスの騎士』だね？」

君の天敵の教皇軍の者だよ・・・」

「何のつもりで此所に来たんだ？」

「フォッフォッフォッ・・・何を隠そう、大得意の布教だよ」

ガラスは老人に向けて鉄砲を放った。しかし、老人とは思えない早さでかわされ、飴の銃弾をくらった。

「うわっ・・・！？」

「君が叫んでいる間に空中で10回転もしたさ　のろい奴ばっかで困っちゃうよ」

しかし、希望の光が差し込んできた。

「破壊活動反対！デイスイズ　モーメンツ！プオー！」

「ハイケル・・・」

「誰だね君は？宗教に入りたいのかい？」

「とんでもない！新しい歌謡曲を『サン・ウオーク』をしながら歌
いたいのさ」

そう言うときハイケルは踊り出した。

「・・・くだらん！」

老人は叫んでから一瞬で消え去った。

これが最強の敵とはグアラスは思えなかったが、まだ本気を出して
いないという事だけは分かった。

王国と教皇の戦争は益々激化していった・・・

第26話 教皇艦隊撲滅作戦

「・・・教祖だったようです」

「ベルタースの悪魔だと？何故あんな廃墟のビルに！？」

「それは不明です・・・ただ凄まじい戦闘能力を持っているみたいです」

元帥府

「元帥！教皇の艦隊が要塞島に攻め込む計画を立てているようです」

「艦隊も遂に動かしただか・・・『奴隷艦隊』か？」

「そのようです・・・」

奴隷艦隊とは教皇が様々な遠征にことごとく失敗したあげく、弱体化した黒人王国をなんとか征服した際に強制連行した黒人奴隷で構成した艦隊。

「奴隷艦隊は砲台よりも敵船に乗り込んで攻撃し、船ごと奪っていくタイプの軍隊です。」

「・・・なので大砲も重要ですが強い兵士も必要です。・・・そこで例の『ガラスの騎士』、ガラスを主力艦に乗せようと思います」

「うむ、それは名案だ。早速ガラスを海軍基地へ！」

洋館

「最近俺達の出番ねえな・・・」

「む？電話のようじゃな・・・もしもし？・・・海軍の主力艦にガラスが？」

それは良くも悪くも・・・命を大切に伝えて下さい・・・」

「主力艦？なんだそれ？」

「海軍同士が戦闘する際、最重要となる軍艦の事じゃよ！」

第27話 王国第三艦隊VS教皇奴隸艦隊第五

「作戦の内容は以上である。」

攻めてくる奴隸艦隊に少数で突撃。前進してくる艦隊を背後から主力艦隊で一気に攻撃・・・
というものであった。

「元帥、主力艦は整備が完了しております」

「決行は明日日の出から2時間後である。それまでに各自武装や訓練をしておくこと」

「了解致しました」

「グラス・・・お前はガラスの身体だ。大砲の熱が伝わればたちまち溶けてしまう」

「分かっております・・・私は艦内の大砲の管理を担当するのですね」

「その通りだ・・・お前の生命を考慮しての選択だ。」

ちなみに敵艦隊は奴隸艦隊の第五隊。奴隸だけが集まって強制的に動いているから多分戦意は少ないと見ている。」

「奴隸ですか・・・罪もない人々に大砲を撃つのも・・・」

「それは山々だ・・・しかし艦隊を破らねば要塞が攻略され、お前の軍功も無意味となり、

王国で更に多くの死亡者が出る。・・・苦渋の選択だ」

グラスには世界の情勢を此所まで悪くした『人間』、教皇の考えがどうしても分からなかった。

奴隸など無理に捕まえて、他国に侵略して何が楽しいのだろう。精神がおかしいのだろうか。

考えてみれば元々自分はグラスだ。何故そんな人間のために・・・

「・・・教皇。奴隷艦隊が勝てる見込みはほぼ・・・」

「ええい！言うな！ベルタースの力があれば艦隊など必要ないのだ」

「王国軍は数は劣勢ですが技術、戦略共に勝っておりますし、他の大国との関係も友好的です・・・」

しかし、我が国は何度も遠征に失敗、黒人王国をやつと植民地になっているだけ。それにその植民地も

もうすぐ奪還されると・・・」

「うるさい！防衛戦略大臣は黙っておれ！！・・・私はアデルホ・フトラーやフツソリーニの二の舞は

したくないと言っておろう！？ベルタースがあれば世界征服も夢ではないのだ！」

「・・・教皇・・・貴方は一体何をお考えに・・・？」

「敵艦隊は最高速度で要塞島へ向かっている！直ちに出航せよ！」

午前8時50分 王国軍要塞島北東60？沖 王国第三艦隊VS教

皇奴隷艦隊第五

「あれが敵艦か・・・軍艦ってこういうものなんだ・・・」

奴隷艦隊

「敵艦は少ないようだ・・・突撃するぞ！」

「敵艦は突進中！背後からの奇襲攻撃開始まで10秒前・・・9，8，7，6，5，」

「4，3，2，1，・・・開始」

グアラスが乗る主力艦が主砲を撃つ。奴隷艦隊が三隻程撃沈された。

「奇襲攻撃か！？王国軍も卑怯なもんだ・・・」

教皇軍にだけは言われたくないと誰もが思うだろう。

「予想通り奴隷艦隊から兵隊が乗り込んできそうだ。近づかれるまでに撃沈、乗り込まれたら応戦する」

一方、グアラスは軍艦の速度を調節していた。

「グアラス、重要な役だから一応軍艦専門の俺が横につくことにする。ここで方向、速度を・・・」

主力艦の動きを調節する重役を無免許の『元』ガラスがするなんてありえない、と思った方。作者は全くの素人なのでどうか勘弁していただければと思う。

「主力艦に敵兵が乗り込みました！応戦願います！」

「グアラス。お前は陸戦が専門だ。ここは俺に任せて出動してくれ」

敵兵を見ると皆やせ細った黒人ばかりだった。あまりに可哀相だと思っただので、一応捕虜に取ることにした。

どうやら戦意は全く無いようだった。

捕虜をとってから1時間後、奴隷艦隊は全て撃沈された。

すると上空にそのような物に乗り込んだ老人が現われた。

「ん？どこかで見たような・・・ビルの最上階にいた・・・」

間違はなくそれはベルタースでは無かった。赤い帽子をかぶり、トナカイのそりに乗った・・・
その老人は浮き輪を落していった。それは溺れていた黒人奴隷が全員掴むことが出来た。

「上空に謎の老人を発見・・・!!」
それは罪無き者に幸せを与える、寒いところから来る・・・

第27話 王国第三艦隊VS教皇奴隸艦隊第五（後書き）

「・・・教皇・・・続くんです・・・」

「ええい！疲れた！！」

第28話 令嬢で 御座いますっ！！

王国新聞『オドロイター通信』号外

奴隷艦隊に勝利！黒人奴隷を救出！

昨日、王国軍要塞島の沖で王国軍の『ガラスの騎士』グアラスが乗る主力艦と教皇軍の

『奴隷艦隊』が海戦を行い、王国艦隊の勝利に終った。溺れた黒人奴隷も全員救出され、これこそ

『聖戦』と言えるのかも知れない。黒人奴隷は「浮き輪が配られた」と証言するが艦隊は浮き輪を

投げておらず、上空で赤い帽子をかぶったソリに乗る老人が目撃されていることから

「サンタクロースのプレゼント」となったのかもしれない。

「陛下。一面に載っておりますよ」

「全員救出か・・・これこそ完璧なる大勝利！」

「教皇もこれで少しは焦ったのでしょうか？」

「黒人奴隷全員救出・・・これで我が国の信頼はもう無いと思った方が良いでしょう」

「ッおのれ！！何故勝った回数が多いこちら側が焦らねばならぬのだ！？ハンドヌクは！？」

「どうやら庭で愛車を掃除していたようで御座います」

「それはどういう事だ！？何故余裕を持っていられる！？・・・ぬぐうっ！！」

「艦隊での軍功を心からお祝いしよう、グラス」

「有難う御座います、元帥！」

「一人の人命も失わなかったしな。新聞記事にも聖戦と書かれて
いる」

「聖戦は言い過ぎかも知れないですけど・・・」

「まあ、それはさておき、次の陸戦でお供が一人お前に付くんだ」

「お供？・・・どなたですか？」

「いや、それが実は陸戦を見学したいと言った。大手重工業会社
の17歳の令嬢さんが」

「令嬢って・・・そりゃあ危険すぎるでしょ？」

「それがどうしても軍部の戦闘が見学したいと・・・『敬語を使わ
なくても良い』って」

「いや、そういう問題じゃ・・・」

「まあ、とりあえず此所で待っててくれ。連れてくるから」

「はあ・・・」

「連れてきた。令嬢のエリア」テレシアさんだよ」

「あら、意外と人間そっくりね」テレシアって呼んでくれれば良い
んだけど・・・貴方の事は

何て呼べばいいのかしら」

「え・・・それはいきなり言われても・・・」

「（照れてるな、グラス・・・人の心も宿るって言ってたからな
よ）」

「じゃあもうそのまま『グラス』さんで良いのね！」

「え？・・・ああ、はい」

「それじゃあグラス、後は任せた」

「ちよつと待つて・・・」

元帥は扉を閉めて部屋を出た。

「今日から此所の基地で過ごすんだけど・・・私の部屋、来る？」

「ま、まあ何か用事があれば行くけど・・・」

「そう。忙しいのね・・・じゃあまた何かあつた時に会いましょうね。じゃあね！」

グラスは部屋を出て行ったテレシアともつと話しておけば良かったと思つたがまた明日会えると思つて

とりあえず食事をすることにした。グラスなのに食事をするのも変だと思つたろうが、「ド。エモソ」を

思い出すと良い。某和菓子が好きだろ。あいつは。

「元帥・・・グラスの好みに合つてました？」

「ああ、どうやらかなりピッタリみたいだな」

「それが何よりです。仲が良いのが一番ですから。敵から彼女を守つてくれるでしょう」

第29話 食事中に襲われた時の対処法

グアラスは久々に騎士の武装を試してみることにした。輝く鎧、天に突き刺すような剣、何物も

通さない盾、立派な馬に金色の鎧を着せる。鏡で見ると改めて我ながら実に格好良い。

テレシアが見たら何て言うだろう・・・ぼんやり考えていると陸軍将軍が近づいてきた。

王国軍では陸軍、海軍、空軍将軍の上に元帥がいる仕組みで、元帥は三つの軍全てを統率する。

「グアラス君。君は『飴』に負けない上、騎士としても素晴らしい才能がある」

「いえ、そんな事は御座いません」

「謙虚な人ほど、凄い才能を持っている。さて、本題だが次は教皇軍が飴を使って攻撃してくる、

鎧だけの人間ではとても危険な戦場だ。そこで君が小隊の隊長になつてもらいたい」

「そんな、私には統率力など御座いませんが」

「大丈夫だ。君の今までの行動力と判断力を見ての判断だ。君なら必ずリーダーシップを発揮し、

こちらの戦況を少しずつ良くしてくれるであらう」

「なるほど・・・そう聞くととても光栄です。ところで、人間の方はどういう防備を？」

「王国で最先端の技術を駆使して、飴が体内に入らず、呼吸が楽に出来るマスクを鎧と共に

付けることにした。発明者は名高きシュタイン博士だ」

「やはり王国軍の科学力は進歩していますね」

「そうだ、科学力で思い出した。今回使う銃は麻酔銃で、撃たれると24時間ほど起きあがらない。」

その麻醉銃で気絶させた人々を救助隊が保護し、施設で飢の苦痛から解放させる。

何故なら彼もまた特別な、いや違った、何故なら教皇軍は民衆を洗脳して自分の軍にして

しまっているからだ。生命を救うのが王国の願い、また教皇とは違うと表しているのだよ」

うすうす分かってたことだが、調べてみると教皇は孤立していて、王国は対教皇の連合国に

加入しているらしい。飢の脅威で中々他国は手が出せない・・・という事だった。

今日は大佐が騎士の訓練をすることになっていた。

「まず、対歩兵の戦闘の仕方だ。まず武器を歩兵の顔の高さにおろし、歩兵に向かって突進する。」

残酷だと思った人。そんなこと言ったら戦場に行けない。

「次に対騎馬戦闘。いきなり武器で攻撃はせず、自分の防御を優先する。相手が攻撃を仕掛けてきたら、

そこで隙について素早く攻撃する。相手が弓矢を持っていた場合、即座に相手の弓か手を斬る。」

「なるほど・・・」

「そして食事中に襲われたとき。基本、武具は近くに置いておくがとっさに対応できない。

・・・そこで、箸やフォーク、ナイフ、皿を武具のように扱って身を守る」

食器やなんかで敵の攻撃なんて防げるのだろうか。誰もがそう思ったが勿論口にしない。お察し下さい。

第30話 山菜黒ペディア

出撃する一日ほど前、グラスは言葉の勉強も兼ねて図書館へ出かけた。

賑やかな所も良いが、静寂に包まれた図書館も中々くつろげる。

図書館の管理人はどうやら国内有数の魔術師であり、呼出があれば声だけを使って

返事をしてくれるらしい。少し試してみたくなり、心の中で呼んでみた。

「お呼びですね。初めていらっしゃる方ですね。誰でも私に興味を持つ物です」

「失礼ですがお年はお幾つ？」

「私は今年で1万歳にもなりますか・・・」

「一万歳・・・？といえますと？」

「そう、人類史上の大事件、農業革命が起こって家畜を蓄え、作物を育てるようになった時、私は

この世に生まれました。・・・ですから都市国家も、時の世界帝国が興亡していく様子も、

中華帝国の発展、新大陸の発見・・・奴隷王国を教皇が復活させるなんて思わなかったけどね」

そういうと管理人の声は聞こえなくなった。

グラスはとりあえず面白そうな本を探してみようと歩き出す。

「関門の多い換気扇」「我輩は婿である」名作品はタイトルが意味不明である・・・と、

グラスは学んだ。全部が全部そうではないのだが・・・

その中で、「山菜黒ペディア」というのを見つけた。色々な人物や物について説明してある記事が

たくさんあるが、「このページは右に寄りすぎています」「嘘八百

の山菜黒」とか色々と変な

ページが並ぶ。記事の下には「加筆フォーム」というものがある。一体何だろうか。

「・・・ああ、山菜黒ペディアですね。皆様に笑いをお届けするユーモア辞典ですよ。誰でも気軽に書き加えることが出来るんです」

なるほど、そういう事か。しかし、やっぱり人間って面白いんだな。早速グアラスは検索してみることにした。

グアラスが山菜黒を見て笑い転げていると、テレシアが来た。

「何読んでるの？」

「てっ、テレシア？」

「・・・何なのこれ？変な嘘のことしか書いてない・・・でも面白い！借りてこっつと！」

「あっ、テレシア・・・」

その時、ちょうど放送が入った。

「連絡します。明日の遠征に参加する兵士の方々は、訓練場に集合してください。」

そうだ、明日は戦況を左右する遠征が始まる。行ったらしばらくは戻れない。

「テレシアさん！行きますよ」

「あ、そうだったわね。行きましよ」

二人は廊下を駆けていった。

第31話 世界連合

“北西の列強” 6国。

フレンク王国。

インカン王国。

テレス帝国。

クロノント王国。

レセイム帝国。

そしてシュルム王国。

“西大陸の英雄” 2国。

ハメリコ合衆国。

大華人民共和国。

“北の大国” 1国。

ロシクワ帝国。

“先進の島国” 1国。

倭国。

以上世界連合が軍事力を駆使して教皇軍征伐計画を立てている。
これだけの大国が集まってしても、ベルタースの力にやっと及ぶほどなのである。

第32話 “作戦” 第一波攻撃計画

訓練場には世界各国の列強が集まっていた。

それぞれ鎧や武器、装飾品も違い、文明の広さを物語っている。会話している内容も違う。

「総兵力と距離、科学力から推定して劣勢なのは・・・」

「突撃すりゃあ、教皇なんて一発さ！」

「大丈夫かなあ・・・俺達もおかしくならないといいけどなあ・・・」

「俺達の勝利は決まっているようなもんだ！」

「賠償金を得るためのルートは・・・」

民族はそれぞれ性格や考えることが違う。

その時、王国の外務大臣が放送した。

「それでは各自訓練を開始する前に、各国のトップの方々に集まっていたください。」

国王、皇帝、国家主席、総理大臣、天皇、大王、大統領。どれも世界情勢を握るトップばかりだ。

大国であるハメリカ合衆国の大統領が台に立った。

「我々が直面する戦争は世界の存亡をかけた世界大戦となる。狂気の教皇を打倒せねば、世界は洗脳され、終末を迎える。それを阻止する為、世界連合が集結したのである！」

大きな歓声上がり、大拍手が飛び交った。グラスもテレシアもとりあえず拍手した。

次に、倭国の天皇陛下という国家の象徴が台に上がる。どうやら世

界的にも偉い方らしく、皆

静まりかえっている。

「今回、世界大戦となる大戦争が起こることを誠に悲しく思います。人命が失われる事は人類が

自ら引き起こしてはならないのです。その為にも、皆様、ご自分の命を大切になさって下さい。」

戦争を嫌う人間もいる事に、グラスは少し安心していた。

次に大華人民共和国の国家主席らしき人物が台に立った。

「ハメリカに次ぐ東洋の大国として、倭国と共に東の要を守らなければならぬ。天皇陛下の仰有られた通り、

人命を何より尊重しなければならない！我が国も数十年前、東南の国々に宣戦した。それを償うにも・・・」

数十年前まで好戦的だった大国が人命を尊重するようになる事もあるのだろうか。

教皇に勝利する為、訓練前に作戦が知らされた。

人類史上空前の総兵力と科学力を駆使した大戦争になるという。ま

ず、第一派攻撃だけでも35万人が動員

されるというのだ。最終的に第六派攻撃まであり、連合国の軍隊をほぼ総動員する。

総兵力は合計して約400万人。作戦も計画も巧妙に作成されていて、国々の特徴を最大限に生かせるようになって、国々の特徴を最大限に生かせるようになってる。

「さて、我が王国軍は正面衝突を避け、迎撃、背後からの奇襲専門となっている。突撃は大国が専門、

貨物や物資の輸送は倭国が担当する」

第33話 ハンドヌクの趣味

この世には大戦争が4つある。

一つ目は紀元前5600年、キリスト教徒の大反乱。

二つ目は紀元前1400年、時の大帝国、ベルシャのイスラム遠征。

三つ目は紀元前末、世界の終わりが来ると予言した皇帝が大陸中で大戦争を展開。

四つ目はこれよりお話しする教皇の引き起こした世界大戦。

行っておくが規模が相当である。4大大陸が存在するがこの全ての大陸で大戦争が展開される。

作者のストーリーもおかしくn・・・いや、スケールがでかくなっているのです承するよーに。

作戦会議が各国で終了すると、各軍は戦場へ向かっていった。

「陛下、それでは明日、正式に出発式を行いますので、それまでこゆるりと。」

「うむ。分かった。・・・グラスと令嬢は図書館、軍関係者は会議室、客は大臣と会談・・・
絶好の機会だ。」

ハンドヌクは自分の部屋に行くと言ったDVDを取り出した。

「やっと見られる・・・最近アニメの放送時間帯変更が多過ぎて困っちゃうぜ」

・・・一国の主が戦争中にそんな事を言えるのが不思議だ。

「俺の愛する涼宮 春日たん、カーズガ！カーズガ！カーズガ！」

「なぞなぞ」みたいに地球儀を解き明かしたらこの春日がどこへでも行きますよ。」

「かつ春日たん!!こつち来てよ!!」

会議中の大まじめな国王とは思えない。アニメと政治を両立できるなんてある意味天才である。

・・・病的でもあるが。

「春日は宇宙人・超能力者・そしてこの春日を尊敬してくれる人
しか興味は御座いません」

もしいるならこの春日の所に来なさい」

「偉そうなんだよお前は!失礼でしょ!」

「えーっと・・・誰だっけこの春日たんじゃない方の人・・・ツツ
コミの・・・そうだ馬鹿林だった」

「この作品のタイトルは涼宮 春日の憂鬱・・・そう・・・私を愛
してくれる人がいない事です」

「当たり前だろ!」

「違うもん!一国の主であるこの俺が春日たんを愛してるもんね!」

「皆さん、この春日は独りでも生きていけ・・・あれ?いなくなっ
ちやうの・・・?行っちゃうの・・・?」

「春日たんツンデレだ」ハアハアw・・・そうだこの後は春日たん
の節約ギリギリ生活特集が・・・」

これがハンドヌクの裏の顔である・・・皆さんの周りにも、一見
まじめそうでも裏では・・・という人が
いるのでは?

第34話 敗走、そして快進撃

早朝、城門前訓練場

「今日より、教皇軍との本格的な戦闘が始まる。皆、昨晩は大切な人と過ごしましたね」

兵隊が少しざわめく。

「最期だと思つて手料理を食べてきた」

「家族全員に礼を言つたぞ」

「これは史上空前の世界大戦となる。人類存亡の聞危機を救つべく、一丸となつて教皇に立ち向かうのである。」

「ここで、新たに世界連合に加盟した国々を紹介します。」

アフリカに存在する発展途上国のほとんどが世界連合となりました。そして大国である

南半球のモーステラリアが加盟しました」

こうして人類の存亡を賭けた、世界大戦が幕を開ける。

よくある設定？ 作者は変人だ、「よくある設定」なんて名前だけだ！ 見たことも聞いたこともない小説になると思うが？

ところで一つ教えておきたいことがある。

遡ること千年前、侵略される前のハメリカ大陸・・・

マヨ文明（笑）の予言が最近注目される。

この世界でも予言は注目される。

例を紹介しよう。

口の上の太陽は人を殺めることを要求する——これはまさしくあのドイツの虐殺者である。

そして予言はこの文章を最後に途切れている。いや、途切れてはいない。石版が盗掘されているのだ。

「第四の大戦が起こる時」そこで終わっているのである。

果たしてこの後にどのような文章が続くのか……それは人類が決めるのかも知れない。

「大佐！こちら元帥府！最前線はどうだ！？」

「爆風が吹き荒れ、飴の香りがする！すでにハメリカ兵の数人が洗脳されたらしい。」

大砲と鉄砲の撃ち合い、軍馬の衝突が激しく行われている！」

「グラス……大丈夫かなあ？」

「テレシアさん！ここからは本当に危険ですよ！？」

「大丈夫よ！私なんかテロに3回も巻き込まれて無傷で帰ったわよ」

「いいんですか？」

「もう、良いつていつてるじゃないの。もうこの際、責任は全部私が取る。だから早く行って」

「……突撃しますよ！」

グラスは軍馬を走らせた。飴の香りがする。

「小娘なんか乗せてやがるやつがいるぜ！あいつから……グアッ

！」

ガラスは鋼鉄の剣、テレシアは後ろから鉄砲で援護する。

「これなら絶対行けるわね」

その時、味方の軍隊が突然引き返し始めた。大声で叫ぶ声が聞こえる。

「前線の兵士が洗脳された！引き返せ！」

ガラスは本拠地であるメゴルフに戻った。

メゴルフ・・・酒の貿易で栄えた軍事都市。貨物や物資の輸送の要となっている。

「作戦立て直した。まず鎧を改良することだ」

「あともう一つ。ハイケル・マクソンを連れて行け」

「何故また、演歌歌手兼内職の方を？」

「あいつには人間の精神を強くする、科学的根拠のない力があるらしいのだ」

「そんな人を戦場に連れて行って・・・何の役にも立ちませんよ？」

「まあ、やってみるだけの価値はあるだろ。あともう一人、助っ人が居る」

「え？まだいるんですか？」

「伝説の麻呂を連れて行く。あの『予定も貼らずに要塞建設とな！』のセリフで軍部を風刺した奴」

「（。A）ポカーン・・・」

翌日・・・

「まっ、麻呂は帝に仕える大臣であって、ハンドヌクの家臣では（ry」

「黙りたまえ！」

「さっ・・・左大臣様・・・」

「この人類存亡を賭けた大戦で、帝だのハンドヌクなどと言っている場合か！」

「・・・シヨボーソ」

「テレシアさん、今日こそ突撃しますよ？」

「大丈夫よ。思いっきり行つてよね」

こうして連合国VS教皇の世界大戦が本格的に幕を開けたのである。正面から敵兵が飴を投げつけてくる。もちろん鎧の中までは入ってこない。

後ろからハイケルの歌声が聞こえてくる。麻呂の叫び声までもがリズムに合う。

「すなすなすなわちみかみかみどの」

「鬼嫁さんよお♪鬼嫁さんよお♪頭を上げればそこにいる♪」

「麻呂は決して♪麻呂は決して♪罪など犯しておじゃらんZO」

「よし次は『おいてけ！軍服』歌うぞ！プオー！」

軍部の作戦は『平和的に逆にこつちから洗脳してしまおう作戦』であつた。

「麻呂お！？変な顔！」

「アラアアアアアアアア！変な顔ではおじゃらん！！こつち見んなでおじゃる！！」

「ちよ・・・鼓膜オワタ」

こうして鼓膜が破れて戦いにも敗れた教皇軍。遠征一回目は終了し

た。
お後が宜しいようで。

第34話 敗走、そして快進撃（後書き）

続くでおじゃる

第35話 晩餐会

ゲスト多数、正体不明の刺客も出演中の中、この晩餐会で大体の人物が分かるだろう。

「グラスさん、食事はしないの？」

「ああ、心は持つてるけど、食事はしないんだよ。燃料を飲むけど」
「燃料・・・ね」

「それでは間もなく晩餐会が開催されます」

「そろそろ行きましょ」

ハイケル・マクソンが舞台上へ、中央の席には元一条三位、麻呂の姿が。

そして端の方の席には・・・サンタクロースが！

「それでは皆さん、ディスプレイツツ！！晩餐会をお楽しみ下さい
！それでは一曲、

しいゝれたこおゝのみさあゝゝきにいいゝビルがゝ建設予定ゝ」

「あの人、歌手なの？」

「自称、キングオブ・演歌」

「あ、その姫。麻呂と話でもせんかな」

「歯が真つ黒よ？顔が真つ白で変な帽子かぶってるし」

「むあ！無礼なあ！我は畏れ多くも帝より三位の身を賜り、中納言を」

「まあまあ、落ち着いてくださいよ、この画像あげるから」

サンタクロースが近づいてきて麻呂に画像を渡した。と同時に帽子と髭を取り、御老公になった。

「画像サンクス・・・トツ、徳川！？」

「また会いましたな、一条三位」

「・・・ま、また会ったのお、先の副將軍」

麻呂といえば黄門を前にしてニヤニヤしていた、最強の精神を持つお方である。多分。

「・・・ところで左大臣様は？」

「・・・俺がネット上で叩きまくってた人物が左大臣様だったらしく、10年前に

出て行ったでおじゃる」

「・・・それはひどい話ですな」

グラスも燃料を飲みながら会話に入る。

「帝と徳川ってどちらが強いんですか？」

「・・・対等な感じですか？」

「喧嘩したらドラマのシナリオ上、帝があばーんされそうでおじゃりましゅる」

「麻呂さんってお年はいくつなの？」

「まっ、麻呂は・・・45」

「お嫁さんは？」

「・・・いないでおじゃる」

「独りの生活って楽しい？」

「・・・最近ドラマにも出られず、滅茶苦茶淋しいのである」

「いつも何してるの？」

「・・・2ちゃ。ねる、V。P、Z。Pとかで画像探しまくりで日が暮れるでおじゃる」

「次は ネット一人旅 もってけ！軍服 を歌うぜえ！」
ハイケル、絶好調。麻呂、スネる。

「ねえねえ麻呂殿、一日中PCで恥ずかしくないの！ねえねえ！」

「う、うるさいでおじゃる！徳川のくせに！老人のくせに『ねえねえ』なんて」

「老人ですとお！！私はまだまだ若くて元気で・・・グギヤ」

「ギツクリ腰でおじやるwww
マジつけるんでおじやるんだけどwww
wwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwww
」

こうして晩餐会は夜中まで長く続きました・・・

第35話 晩餐会（後書き）

麻呂「教皇はどんな奴でおじゃるか？」

黄門「お前みたいに『ポスターも貼らずにビル建設とな！』っていう奴w」

麻呂「麻呂は畏れ多くも（ry」

第36話 幻覚

晩餐会も終り、グアラスは部屋に戻った。

「おやすみなさい」

「あ、おやすみ・・・」

テレシアは上機嫌であった。曲を好きなだけ聞き、甘い物を食べたからだろう。

イスに座り、外を見る。寒くなり、窓は曇っていた。

窓を開けると冷たい空気が部屋に入ってきた。静寂に包まれている。

その時、鐘の音が聞こえた。城の鐘は正午と6時にしか鳴らないはずだが・・・

突然目まいがしてきた。ベットに倒れ込み、気を失ってしまった。

目が覚めると恐ろしく広い宮殿の広間にいた。絨毯の敷き詰められた床と紫の壁を見ると・・・

何と教皇を象徴する紋章が描いてあったのである。奥から老人が近づいてくる。

「お目覚めかね グアラス君・・・うゑwwwwwwwwww」

「お前・・・教皇の手先の？」

「教皇 それは事実上私が操ってます 孫と共にね」

「国民をあんなに苦しめて・・・どうするつもり何だよ!!」

「後に洗脳した国家を使ってベルタース連合を指揮、地球を滅ぼして私だけ生き残り・・・」

『僕は新世界の神になる』という訳なんです」

「新世界の神って・・・お前狂ってるだろッ!!」

「まあまあ落ち着いて その前に勝岡就農って知らないかね？」

「就農？・・・知りませんが」

「戦場に現われては飴を溶かし、弾薬を焦がして使用不可にしてい
く恐ろしい敵

しかも王国軍に『諦めんなお前！！まだお前にはチャンスがあるん
だよ！』『フレ― フレ―

あ・な・た！フレ― フレ― 王国軍！』みたいに邪魔をして来る
んですよ」

「熱いですねそれは」

「まあ、それはさておき・・・君、洋館を復活させるのではなかつ
たのかね？」

「え？」

「戦争に参加するのではなく・・・洋館を復活させるのが目的だろ
う？」

それなのに、科学者に人間の身にしてもらい・・・」

「・・・だから」

「・・・ん？何か言った？」

「洋館を復活させるためにまず世界平和を取り戻すこと。洋館が復
活したって平和じゃ無ければ

意味が無いじゃないか！？お前が人々を苦しめるから・・・だから
戦うんだよ！！」

怒鳴ったので老人は一瞬驚いたがすぐに落ち着くと、

「創価 創価 ならお前も今日から邪魔者^{てき}だな」

そう言うのと幻覚が消え失せ、天井が見えた。

どうやら最大の敵を怒らせたようだったが・・・ガラスはそのまま
ま寝てしまった。

第37話 経済の最高神

教皇の戦線は北上し、世界中へ広がっていった。
戦線に入る間近の地域があった。大油田地帯である。

此所には造船や工業を支える燃料だけでなく、世界経済の最高神と呼ばれる大会社があった。

アムキリ「モンツ会社——創設は300年前、創設者はラトヒ・フルドアという名で、軍部の元重要人物であった。

アムキリは食品工業から重工業、全てに関わる企業で、倒産するとなると物価が50倍にまでなると言われている。

この会社の本部が今、戦線に入ろうとしている。
これを食べ止める作戦にガラスが加わる。

「・・・奇策？」

「そりゃゝ勿論。奇策を練らなければ勝てないZE」

この人は新参謀長官のエオミツカ・ツアミ。コメディ映画の監督、戦争映画の監督を両方務めていた為、映画のように面白い作戦を編み出している。

「まず最前線の要塞防衛に花火を打ち上げる」

「花火？」

「美しく大きな音を発して空に引きつけておいて突然のように空爆を行う」

「・・・（啞然）」

中佐がこんな参謀長官で大丈夫かと思ったところで「経済の最高神」

防衛作戦が始まった・・・

第38話 これ、戦争だよ？

「グラス、君に報告することがある」

「何ですか？」

「洋館の皆様が駆けつけてくれた」

机が喋り出した。

「久々だな、グラスよ！」

「凄い！立派ね……」

「このザビエルも作戦に参加することになった」

「この方々は全員作戦に参加する。……というよりも、洋館を参謀本部にする」

「え……？取り壊したりとかは？」

「勿論しない。そのまま使うんだ」

「作戦はもう考えてあるんだ」

ピラミッド型の包囲網を作り、その先頭に麻呂を置く。

そしてそのすぐ後ろには勝岡就農。

更に中心部分にグラスが配属。

「勝岡就農？」

「お呼びしている。この方だ。」

「おお……ガラスだって……人間になれるんだよ……そうだよ……もつと熱くなれよ……！！！」

「はぁ……熱くなると溶けちゃうんです」

「本気になれば全てが変わる……本気になって……教皇倒そうぜ！！！」

「……」

勝岡就農の存在で王国軍はもっと熱くなった。

「作戦決行は明日？」

「そうだ。遠征とは違って早く対応しないと侵略されてしまう」

「お前昔を思い出せよ！！やったじゃん王国軍・・・教皇倒したじゃない！！」

メラメラメラと勝岡が燃え始めたため、皆避難することにした。

「一条三位・・・上手くいつておるか？」

「左大臣様・・・公家復興は順調に進んでおります故」

「あのオスマソ＝トルコさえ利用すれば・・・」

公家の隠謀、教皇の策略、世界連合の「史上最大の作戦」・・・これから世界はどこへ向かうのか？

第38話 これ、戦争だよ？（後書き）

勝岡が涼宮春日を見るハンドヌクを見て一言。

「萌えてるねえ！！」

「見るなよおおお！！」

第39話 王国の旗

「陛下、本当に宣言なさるのですね？」

「・・・する。教皇との決別だ」

“経済の最高神”防衛戦の5時間前、皇帝ハンドヌクは王国を民主主義国とした。

資本主義から民主主義への移行、それは侵略行為を行う教皇との決別だった。

「教皇はもはやキリストではない・・・帝国主義者であろう。」

「それでは宣言致します。」

民主主義国となった事は即座に教皇にも伝わった。

その後、教皇は激怒し、驚くべき行動に出た。

「教皇領を帝国としろ！そして私が初代皇帝となる。この国も帝国主義となる！」

これよりム・ハギ教皇国はム・ハギ帝国となり、初代皇帝はム・ハギとなった。

「黒きキリストめが・・・正体を現しやがった・・・」

“経済の最高神”防衛戦が間もなく開始される頃であった。

「グアラス。お前は麻呂の後ろにつき、令嬢をお守りするんだ！」

「麻呂は畏れ多くも帝より三位の位を賜り、中納言を務めた身じゃ！心して守れ！」

「グラスさん、大丈夫？」

「え？あ、ええ・・・何としても守って見せますよ！」

「教皇軍が前方5キロメートル地点以内に侵入！各自早急に迎撃準備を！」

山のようにつまれた弾薬が大砲に詰め込まれる。

「見えたぞ！目標は鉄砲隊だ！発射あ！！」

「一条三位！！王国を我が声にて、援護致す！！」

王国軍と教皇軍が遂に衝突した。

弓や鉄砲が飛び交う中、グラスは軍馬を走らせ、槍で敵兵を突き刺す。

「ぐはあっ！？」

敵兵が落馬し、地面に倒れる。

「テレシアさん？血は平気ですか？」

「全然大丈夫よ」

余裕を見せるテレシアに強がっている様子が全くないことに驚くグラス。

ドーン！大砲が頭上10メートルほどの所を飛び越え、教皇軍に命中。その瞬間、

「ベルタース発射開始だ！」

と叫ぶ声が聞こえ、甘い香りと同時に飴が飛び交う。防護マスクに包まれた王国軍はほぼ無傷だった。

しかし、甘い香りで頭痛を引き起こし、倒れる者もいた。

何度か一進一退を繰り返し、やがて少しずつ教皇軍が敗走し始めた。グラスは槍で何度も敵兵を倒し、奮戦している内、敗走している事に気がついたらしい。

「何とか撃退したぞ！万歳ー！！」

辺りには血とベルタースの香りが漂い、慣れた兵士で無ければ気分が悪くなる所であった。

喜びの歌と歓声をあげながら帰り行く王国軍の後ろには、王国の旗

がなびいていた。

第39話 王国の旗（後書き）

なんでも、まだ続くらしいぞ。

第40話 軍需工場（前書き）

今年も宜しく御願います。
いやー寒い寒い・・・

第40話 軍需工場

次々に都市を占領した教皇軍であったが、連合軍の激しい抵抗により次第に行き詰まっていた。

連合軍はベルタース中毒の抗体を作り出す研究を始め、教皇軍に対する抵抗を強めた。

「まだ占領されている都市も多い。引き続き、気を抜かずに訓練に励むように」

「はっ！」

王国軍は休む間もなく訓練を行い、武器の生産力も少しずつ向上させていった。

「ガラス・・・お前、人間に似てきたな」

「え？　どういう所がです？」

「まあ、言葉もかなり多く使ってるみたいだし、訓練にも普通に参加してるし」

「博士が人間により近くなる、って張り切ってたっしやいましたからね・・・」

正直、私も人間にこんなにも近くなれるなんて思いませんでしたし、連絡します。直ちに王国軍は兵舎へ集合して下さい」

「次に征服する場所は軍需工場だ。今は占領されて教皇軍の所有地だが、此所を奪還せねば

武器や兵器の生産力は完全には回復しない。そして今回は困難だが、工場を傷つけないようにしながら攻撃をしてほしい」

「了解しました！」

「例の兵器の開発は進んでいるか？」

「ええ、勿論。順調に進んでおります、『紅白大皇帝』・・・」

「あれさえあれば連合軍などひとたまりもなかるう・・・世界は私にひれ伏すのだ」

「楽しみで御座いますねえ・・・教皇」

第41話 麻呂の隠謀

軍需工場奪還作戦決行の直前になり、王国軍は混乱していた。

「ど、どうした!？」

「たた、大佐!どうやら我々が雇った麻呂とやらが反乱を起こしているようです」

「麻呂お!？」

「中納言、一条三位!貴様は我々に対して反抗する気か!？」

「元々鷹がそなた等の味方についたのは公家再興をかけた作戦でおじやる……」

教皇が勝とうが王国が勝とうが我々には関係おじやらん!」

「な、なあにを抜かすカツ!この色白野郎めがあ!！」

「……麻呂を怒らせると怖いでおじやるよ」

そう言うのと麻呂は手を振りかざし、白い霧のようなものを作りだしかかとおもうと、それを

兵隊の方へ投げ、兵隊を吹っ飛ばした。

「うわあああつ!？」

「おーっほっほ!勇敢な王国兵士が悲鳴を上げて飛び上がったでおじやるw

こりや傑作でおじやるわ!」

「貴様あ……邪魔者めがあ!！」

「畏れ多くも帝より三位の位を賜り、中納言を務めた身……一条三位、これよりお前等を御陀仏させてやるでおじやる!」

そう言い放ち、麻呂は突然、「画像も貼らずにスレ立てとなあ」と天にも届く大声で叫び、

爆音で城壁を揺るがせた。

「・・・危なかった」

「地獄に仏とはまさにこの事・・・麻呂とやらが出現していなければ、今頃あの工場は

王国が占領していたことでしょうね」

「さすがに私も冷や冷やしたね・・・」

教皇とその部下は、大聖堂で戦争の計画を練っていた。

「・・・それよりどうだ、例の兵器開発は」

「その計画だけは順調です。・・・あれさえ完成すれば戦局は逆転、我々が有利となります」

「我々と同じく・・・あの麻呂とやらにも隠謀があるようだな」

「・・・“テラサチコ”・・・期待していて下さい」

第41話 麻呂の隠謀（後書き）

テラサチコとは何なのか！？
麻呂の隠謀とは！？

第42話 戦局逆転

戦局が逆転した。

王国軍は教皇帝国の首都寸前にまで迫っている。

麻呂が王国軍を襲ってから一時間後のこと・・・

「ハアーーーーッハッハッ！！王国など相手にはならんなあ！」

「どういう事だ・・・大砲が効かないなんて・・・」

「いずれは公家が世界の頂点に上り詰めるかもしれんのう・・・！」
そして麻呂は城壁をぶち壊そうと、かなり大きな力を出した。

「もうすぐ城も崩壊するぞよ！逃げた方がよろしかろうのう！」

「ああ・・・王国の命運も・・・」

「・・・なにい？おい、そちらではないぞ！」

麻呂は魔力の異常活動を抑えられず、魔力の暴発を招いてしまった。

「なっ、何ッ・・・この一条三位が・・・」

気がついた時には王国の城は傷一つ無く、兵士も無事だった。

しかし、何が起こったか——ベルタースオルズナルが全て消え去ったのだ。

ベルタースの爺もさすがに参ったようで、

「私の頭は4歳」

と言に残し、逃げ去っていった。

「・・・教皇！！王国軍は目の前に・・・！！！」

「まさか・・・こんなに早く“テラサチコ”を起動させる事になる
とはな・・・」

教皇はニヤリと微笑み、歩き出した。

第43話 紅白を守りし者（前書き）

いよいよもつすぐ最終回です！

第43話 紅白を守りし者

「・・・見る！首都の城壁だ！あれを越えればもう首都に到着する」
城壁の上から大聖堂が少し見える。

「グアラス。砲撃を合図に突撃していけ」

「了解しました！」

「・・・ん？あ！子供だ！」

兵隊の前に子供達が現われた。

「ここから先は僕たちの母さんがいるんだ！」

「坊や、別に君たちの母さん達を殺しに来た訳じゃあ・・・」

「教皇様を殺しに来たんだろ！何で殺すんだ！」

「・・・教皇は世界中の人々を殺して、世界を支配しようと・・・」

「違うッ！！教皇様はそんな事じゃないッ！！」

「・・・」

僕達は山奥で生まれたんだ。

親にほつたらかしにされて、街で座り込んでいる所を教皇様が助けてくれたんだ。

ご飯も食べさせてくれるし、よく一緒に遊んでくれるんだ。

「・・・どういう事だ？」

「・・・おじさん達だけに言うよ。・・・教皇様は、悪人のふりをしているんだ」

「しかし・・・だからといって国を帝国に変えたんだぞ？」

「それに何百万人を苦しませて・・・」

「な、なにするんだ！」

王国軍はやむを得ず、子供を保護し、首都へ突入する作戦を決行した。

「撃てーッ！」

銃声が鳴り響き、首都と外界の境目が崩れていく。城壁はかなりもろくなっているようで、容易に突入することができた。

「あれを見る！」

とてつもなく大きい大聖堂の天辺に教皇が立っていた。

「教皇！今すぐ降伏宣言をしろ！」

「それはできない」

「何故だ！お前はもう何千万人という人を苦しめたはずだ」

「ベルタースなど一部の作戦に過ぎん……」

そう言う文教皇はベルタース教祖とその孫を王国軍に向かって放り投げた。

「……わ……私の頭は4歳……」

「連絡します！老人と子供を保護！」

「これからまた何か始めるつもりか？お前の軍隊も国も、残りはいくわずかにすぎん！」

「お前達には見えないだけだ……王国軍との戦争は時間稼ぎで、大聖堂で準備を進めていたのだ」

「……何だと……？」

「……それでは最後の宴を始めようか」

大聖堂が突然紫色に光り出す。上空に紅と白の魔法陣らしきものが浮かび上がる。

「今から我が召還する者はお前達の力を遙かに超した超存在だ。勝

てるはずもなく、一瞬で滅びゆく」

王国軍が連絡を入れた。

「本部へ連絡。大聖堂の上空に人らしき物体を確認」

「なんだあれは？ただの人か？」

ガラスは疑問を抱いた。当然だ。人が浮いているのだから。

「何であんな所に・・・？」

すると人らしき物体は怪しい歌を歌い始めた。

それは聞く者を永遠の世界へと誘うように、世界へと響き渡った。

「なんだこの歌声は・・・」

「いかん・・・戦意喪失してしまう・・・」

突然歌声が止み、教皇の声が響き渡った。

「さあ、世界に住む愚かな民族達。いよいよ最期の宴が始まろうとしている・・・

祈りを捧げるも、抵抗するも、好きにするがよい・・・

絶対神の前には何を持ってしても無力」

不気味な轟音が響き渡り、大聖堂の後ろに巨大な影が浮かび上がる

「紅白を守りし者、」

「テラサチコ」

降臨
！
！

第44話 我らが世界、何故に

「本部へ緊急連絡！教皇首都大聖堂上空に未確認巨大物体が出現！」

「大聖堂上空！？至急援軍を送る」

「・・・元帥、私も行く」

「陛下！？一国の主を危険な場所にお連れすることなど・・・」

「いや。グアラスはその危険な場所にいる。・・・あいつは国の為に折角の命を捨てる覚悟でいる」

「陛下・・・しかし・・・」

「うむ・・・確かに、元帥の君にとっては戦場に連れていくなどともない、と考えているだろう。」

しかし、もしこれで世界が一度滅びるのだったら・・・これは神の決めた運命だ。

勿論、私が戦場に行くことも運命かもしれない。・・・どちらにせよ、一国の主には国の最後を

見届けるという使命があるのではないのかな？」

「・・・なるほど・・・分かりました。滅びるのを見届ける・・・いえ。」

陛下には我々が国を守り通し、平和を勝ち取る姿をご覧になっていただきましょう」

「・・・よし！援軍を配備してくれ」

「巨大すぎる・・・化け物だ」

「教皇の最後の切り札・・・それがこの怪物か」

その時、遙か天空から声が響いた。

「貴様等王国軍を打ちのめすために私は生きてきた・・・」

このテラサチコを倒せる者などおらぬ」

突然、大聖堂の天空から漆黒の渦が王国軍に向かって猛スピードで突っ込んできた。

「ぐあああつ!?!」

「本部、連絡・・・グアツ!?!」

「大佐!前線との連絡が途絶えました!」

「何イ!?!非常通信機は?」

「ダメです!回線が破壊されているようで・・・!!」

王国軍は進軍しながら連絡を取っていたが遂に途絶えてしまった。

「うーむ・・・しかし、連絡以前に問題があるな」

「そうですね。元帥・・・王国軍単独で行っても・・・ん?」

「後方に大多数の戦車と兵隊を確認!!」

「教皇軍の隠し球か!?!畜生ッ・・・!!」

「こちらはフレンク王国軍!」

「こちらはクロノント王国軍!」

「私はロシクワ軍元帥!世界連合の代表として、ハメリコ軍に代って連絡する。」

世界連合は解散する予定なのだが、まだ教皇の脅威が収まっていな
いという情報を聞きつけ、

世界連合を総動員し、シュルム王国と共に戦おうと思う」

一時間後、連合軍は大聖堂を包囲した。しかし、その瞬間に戦車は
必要が無くなった。

大聖堂の上に、人影があつたのだ。

「ポーウ！！演歌歌手を代表してこのハイケル・マクソンが教皇を倒します！」

「マクソン！お前の行動は危険すぎるぞ！？」

「イイーヤ！世界を救うには歌と踊りしか無い！アーオ！」

「このテラサチコに勝る演歌歌手などおらぬのが分からないのかあ？」

「そんなの分からないじゃないのよっ！大体貴方なんてタダの人殺しじゃないのっ！」

「テリシア！？いないと思ったらいつの間に・・・！？」

「ぐ、グアラス！あいつは令嬢だぞ！すぐに連れ戻せ！」

「しかし、あの高さでは・・・大聖堂には登れないし・・・」

「うーむ・・・何とかして連れ戻さなければ・・・」

「それじゃあ早速、君を倒して差し上げよう！ポーウー！」

ハイケルは踊りと共に演歌を歌い始めた！

「貴方は 何でそんな派手な格好してるの 心さえ美しければ 派手になんかしらないはず」

「しっ・・・失礼なア！」

「まずその厚化粧 肌が荒れるし醜いし（ポーウ） まずはその（アーオ）その汚れた面を（ポーウ）さらけ出したらどうだい」

「この無礼な！そのような歌で私を倒そうというのか！？」

「ああ、そうさ。だってこれは、世界中の総意だからね」

「総意・・・!？」

「世界の人々は誰一人、世界をここで終わらせようなんて思っただけじゃない。

1000年、一万年だろうと、人類の歴史を築いていくつもりだ。勿論僕もね。

誰もが世界を終わらせようとする責を冷たい目で見ていたということさ・・・分かる？」

「ぬう・・・ッ!!そのような事が・・・あつては・・・!!」

「僕が知らないとしても？ねえ、テリシア」

「ええ！教皇さんは意外と心に傷が付きやすいんでしょう？冷たい目、なんて言われたら・・・？」

「この小娘が・・・あ・・・なんでそれを知っているんだアア・・・!!」

「崩れる！大聖堂が崩れるぞ！皆、撤退しろー!!」

教皇が力尽きると同時に、大聖堂も崩れ落ちた。

その後日。大聖堂の修復作業が始まった。
王国にも平和の空気が流れていた。

「特殊任務表彰。ガラス。貴殿は非常事態の中、冷静な行動で民を救いました」

「特殊非任務表彰。ハイケル・マクソン。貴殿は軍部の関係者では無いにも関わらず、世界平和の為に力を尽くしました」

「よって、この二人を正式に表彰します。・・・国王、ハンドヌク」

「被告人、ム・ハギは教皇という神聖な立場にもかかわらず、帝国を主張したばかりか、テロまで行い、世界を危機に陥れた罪は極めて重い。極刑以外に処すものがない」

「はい。納得しております。命を以て償おうと・・・」

「しかし、国王の直々の申請によって、教皇の地位のまま、労働を20年間義務づける」

「教皇？この私が教皇を続けていいのでしょうか？」

「労働の義務を守り、世界の期待を裏切らぬよう、しっかりと教皇として生きてください」

最終話 和む時間

「・・・ああ。終わってしまった」

「何をすっかりしてるんだ？平和になったし、ハッピーエンドだ」

「最初は洋館だったのに、俺達が全然活躍できなかった」

「樽もビール瓶もテーブルも！最初は良かったのにな」

「でも意外と疲れたでおじやるな」

「麻呂！？いつの間に!？」

「それより教皇。国王に感謝しろよ？」

「お情けをかけてやったし、これからは教皇にいばれるな！」

「ったく・・・なんかお情けを頂いたのに悔しいのは何故だ」

「ところでハンドヌクさん。表彰状のこの文字、間違ってますん？」

「ああ、そりゃあ俺がハンドヌクだからだな。すまん」

「どういふことですか？」

「ハンドヌク・・・手を抜く」

最終話 和む時間（後書き）

かなり滅茶苦茶でしたが、これにて完結。

私の他作も是非ご覧下さい。読んでいただき、誠に有難うございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2352i/>

ガラスの破片とある世界史

2010年10月9日00時58分発行